

◆連載◆がんの時代 7

術後しばらくして温存した左乳房に違和感

リスベット・U

私が受けた手術は、「乳房温存術」と呼ばれている。がん細胞だけを取り除き、なるべく乳房の形を残そうと試みる治療法である。乳腺から乳首までを切除する「全摘手術」と比べ、生存率は変わらないとされ、少しでも温存できるならそうするのがいいという風潮が高まってきたところだった。聞こえも「全摘」より残酷さが印象を受けない。

しかし、残存する組織があるぶん、当然「局所再発率」も高い。手術後の再発に関する統計に、術後二十年間の乳房温存術の局所再発率は、放射線療法を受けなかった場合には39%、受けた場合には14%。一方、乳房全摘術の局所再発率は2%以下という結果がある。つまり、私の場合放射線療法を受けていないので、二十一年間に局所再発する確率は約40%ということになる。

統計データは参考にはなるが、「わたくしの未来」を予言してくれているわけでもない。当然数字の読みどおりに事が運ぶことはない。しかし頭でそうとわかっていても、何となくしばらくはまあ心配ないだろうと思ってしまうのが普通である。

温存した、つまり残った左乳房に違和感を覚えたのは、術後しばらくのことだった。季節は秋から冬に向かう頃、だんだんと空気が冷たくなるにつれ、乳房が時々硬くなったり色が悪くなったりするのに気づいた。少し揉んだりお風呂に入ってからだを暖めたりすると、だんだんと柔らかくなっていくので、術後には時々あることなのだろうと思ったりもした。私は元来物事をあまり深刻に考えない性質なのだ。

冬から春が来て、やはり残った乳房の違和感は消えなかった。定期検診の際にそのことを告げたところ、心配ならMRIを

撮りましょうということになり、私自身何もなかったことを確認するつもりで検査を受けることにした。MRIとは日本語では「核磁気共鳴画像法」という大仰な表現になる。文字通り磁場と電波を用いて体内を撮影する検査で、CTと機械は似ているが、CTが苦手とする断面画像を撮影することが可能な検査法である。

検査というのは何回受けても嫌なものがある。何が嫌って、検査そのものの苦痛もさることながら、その結果を聞くのが恐ろしい。いくら検診や早期発見の必要性を説いても、検診率がなかなかあがらないのは、「結果が怖い」という理由で皆が逃げ腰になるからだ。検診結果を待つまでのストレスが嫌だからと、あえて検診を受けない人も大勢存在する。その恐怖のMRIの結果は……。有難いことに「異常なし」であった。時は五月、これから暖かい季節になれば違和感もなくなるに違いないと心底ホッとしたことを覚えている。

ところが……。それからしばらく経った七月のこと、やはり定期検診で触診を受けた際、主治医の顔が曇り、一瞬手の動きがとまった。「んー、念のために細胞を調べておきましょう」と言うと、最初のときと同様、針を刺して細胞を採取し、がん細胞の有無を調べる検査を行ったのだ。しかしその場になっても私はまだ楽観視していた。だって最初の手術から一年も経ってないし二か月前のMRIでも異常なかったのだから。ところが神様は残酷であった。一週間後に結果を聞く予定だったのが、その日の夕方主治医からの電話を受ける。病院からの電話なんてロクな話はない。案の定、「再発しています」の声が受話器を通して私の耳元に深く刺さった。

本をつなぐ 7

デザイナー 田中淳子

乱歩賞受賞作家が見たコンビニの実態

東京芸大美術学部卒で、30冊の著書があり、85年には「モーツァルトは子守唄を歌わない」で東野圭吾と乱歩賞を同時受賞した輝かしい経歴の持主が、50代でホームレス一步手前までいき、食うためにコンビニでバイトした一年一ヶ月の記録。と聞けば、え、なんでそんなことになっちゃったの、とその事情が書かれてあることを期待するでしょう。

しかし、それに至るまでの事情は最後の方にちらりと出てくるだけで（でも、まあその部分だけでもワーキングプアになっちゃった理由もうすうすわかるのだが）、「はみ出し者が慣れぬ浮世のバイトに右往左往した体験記」として書かれて



◆高砂コンビニ奮闘記 悪衣悪食を恥じず  
◆著者 森雅裕  
◆定価：1575円  
◆発行：成甲書房  
◆ISBN978-4-880862583

いる。現金を数えさせると30分もかかり、その上間違え。販売期限切れを撤去させるパンだけで30分かかる。ふてぶてしい訳じゃなく、おどおどしているが、人の言うことを絶対聞かない……バイトの面々。お金を投げつける。店にケータイを忘れたと主張し、見つからないなら弁償してくれと桁外れに理不尽なことを言う……お客の面々。なにかもう人間の育てられなかった品格のなさみたいなのが、コンビニという誰でもどうぞという間口の広い空間で、とどめもなく出てしまふといった感じだ。

コンビニ関係者は深い共感を得られ、一般ピープルもコンビニの興味深い実態を知ることができると思う。元コンビニ経営者の妻である私が一気読みした本。

▲「本をつなぐ」原稿募集中！

その本を知ったきっかけを入れて、おすすめのコメントを600字程度でまとめ、有限会社ゆいぽと（表面参照）までお送りください（メール、ファクシミリ、郵便で受け付けます）。採用の方には記念品も準備しています。

編集後記

創刊時に決めた計画からは二か月と十五日、今年になって見直した予定から毎月一か月遅れましたが、無事に7号を刊行することができました。お原稿をお寄せいただいたいるみなさまに、心から感謝申し上げます。

ひとり出版社「ゆいぽと」は、五月二日、創立八年目に突入しました。初夏を迎えるころになると、希望と不安をかかえて歩きはじめた二〇〇五年を思い出します。この七年間で得られたものも大きなことといえば、ひとりでは何もできないという当たり前のことを、あらためて実感したことかもしれません。

おかげさまで、「ゆいぽと」には、たくさんの方がいろいろなかたちでお力を貸してくださっています。そのつながりをいっそう深めながら、新しいつながりも結んでいきたいと考えています。（山）

お知らせ

ゆいぽとでは、みなさまの作品や経験を本にするお手伝いもしています。随筆集、紀行文、自分史、歌集、句集、写真集、絵本などを作ってみたいとお考えの方は、お気軽にお問い合わせください。

編集・出版 ゆいぽと

TEL 052-955-8046

Eメール yuiyama107@wine.ocn.ne.jp

「ゆいぽと」バックナンバー

- 創刊号インタビュー／横幕真紀さん（「ずっとそばにいるよ」著者）  
「ありがとう」を伝えたい！
- 2号 インタビュー／齊藤とも子さん（「きのご雲の下から、明日へ」著者）  
「きのご会」を次世代につなぐ
- 3号 インタビュー／堂本暁子さん（「生物多様性」著者）  
「COP10」の成果を未来につなぐ
- 4号 インタビュー／茶畑和也さん（イラストレーター）  
そろそろ進むことにブレーキをかけないといけない
- 5号 インタビュー／にわぜんきゆうさん&久子さん（「しあわせしあわせ著者」）  
二十年という年月でものごとをみれば、物語がある
- 6号 インタビュー／神山里美さん（「こころの寺めぐり」著者）  
やっぱり私はお寺が好き。好きっていう以外何もないの。

\*ご希望の方には送ります。無料です。